

書評

권덕영 『재당 신라인사회 연구』 일조각, 2005
(権恵永『在唐新羅人社会研究』一潮閣、2005)

近藤浩一

1. はじめに

本書は、韓国の釜山外国語大学校に在職する権恵永氏がこの5年間に発表されてきた在唐新羅人に関わる約 11 編の論考を骨子として、それらを編成し直し、新たに一書にまとめた論文集である。著者はこれまでも博士学位論文をもとに著書『古代韓中外交史—遣唐使研究—』(一潮閣、1997)を公表しており、現在韓国における、遣唐使を中心とする古代韓中関係史研究の第一人者である。著者の問題関心は、本書の冒頭で述べられているように、元来から韓国古代史における黄海の重要性を解明することであり、博士論文においてそこを往来した遣唐使の活動と役割を考察したのもそのためであり、それを一層発展するために取り組んだ次なる課題が、黄海を渡り唐に移住し、そこを生業の拠点にした在唐新羅人社会の研究であるという。また、先に韓国内に設立された海上王、張保阜(?~841または846年)記念事業会のプロジェクトで、「在唐新羅人社会と張保阜」の研究を遂行する機会に恵まれたことが、本研究をはじめのきっかけになったと述べる。さらに本研究の目的は、広くは民族意識に基盤を置く、経済共同体である韓商ネットワークを構築できた在外同胞の起源を探る点にあることを挙げる。

2. 本書の内容

本書の構成は次の通りである。

目次

第1章 序論

I 在唐新羅人社会の研究現況 II 在唐新羅人社会研究の問題点

第2章 在唐新羅人社会の形成と運営

I 新羅人社会の形成 II 新羅人社会の実態 III 新羅人社会と赤山法花院

第3章 東アジアのなかの在唐新羅人

I 在唐新羅人の総合的検討 II 円珍の求法活動と在唐新羅人

第4章 在唐新羅人の海上貿易活動

I 在唐新羅人の対日貿易活動 II 日本を往来した二重国籍新羅商人

第5章 張保皐と在唐新羅人

I 張保皐の商業帝国と国際貿易 II 張保皐と東アジア海域の海賊

第6章 結論

英文要約 参考文献

以下やや冗長になるが、原文が韓国文であるため、韓国における東アジア史関連の最新の研究現況を紹介する意味を込めて、本書の章立てにしたがい、それぞれ内容及び論点を簡単に確認しておきたい。

在唐新羅人社会に対する研究は、早くも1920年代に岡田正之・今西龍氏らの日本人学者により円仁を研究する過程で『入唐求法巡礼行記』を手がかりにはじめられ、戦後に入りライシャワー・金文経・小野勝年氏らにより体系的になされ、現在まで多くの諸氏により継承・発展されている。

第1章「序論」では、既往の韓国・日本・中国にみられる在唐新羅人社会に対する研究成果を分布状況・性格・生活の3つの項目に分けて整理し、次にそれらの研究で見過ごされた点をいくつか指摘することにより、本書で考察すべき論点を提示する。例えば、在唐新羅人及び在唐新羅人社会（新羅村・新羅坊・勾当新羅所などの用語も含む）の基本概念にはじまり、唐国内における自治権の問題や、その形成と解体に関わる問題、新羅本国（人）との関係、唐の政治・経済・文化が新羅人社会に及ぼした影響などの問題がそれにあたり、さらには新たな関連資料の発掘・補完と、宋代の蕃坊や在日新羅人社会など学際的側面との比較研究の必要性を指摘する。

第2章「在唐新羅人社会の形成と運営」では、まず在唐新羅人社会の形成基盤・過程を当時の国際的状況との関連から考察するのに加え、新羅人が居住した分布地域を言及する。ある民族が異国に移住して独自の社会を形成す

るには様々な条件が必要となったが、在唐新羅人社会は古くから徐々に成し遂げられたものであり、その形成と発展には、唐が異民族に開放的であったこと、地理的にも周辺地域で羅唐両国の往来が始終友好関係にあったことを強調する。ゆえに在唐新羅人社会は必然的に生まれる環境にあり、8世紀後半以降新羅国内に頻発した飢饉や政治的争いにより、新羅本国が経済的困難に陥ったために、多数の新羅人が継続的に唐に移住したと論じる。

次には、在唐新羅人社会の運営実態と内部構造、彼等の生業について詳述する。新羅に程近い黄海沿岸部に形成された新羅人社会には、楚州や漣水県城内にみられる新羅坊と、赤山村・劉村・邵村などの新羅村という、ふたつの形態が存在した。両者の責任者はともに新羅人であるが、新羅坊が管轄州または県から直接統治を受け、新羅村が県と村の間に設置された勾当新羅所に統制されたように、やや違いはみられるものの唐の統制を受けていることにかわりはなく、それらは自治権を示すものではなく、唐が彼等を効率的に支配するために考案した制度であると論じる。また著者は、村や坊など所在地にしたがい生業や人的構成（全て新羅人か、新羅人と唐人が混在するか）にやや違いがみられたとしても、在唐新羅人たちがその内部で新羅語を使用し、新羅風俗を維持することにより、ひとつに結束したことを強調する。

その諸相に対しては、円仁の記録にもとづき山東半島登州の赤山法花院を例に論述する。著者はその創建時期を828年前後に張保臯によりなされたと考えており、そこには30名近い僧侶が常駐し、法堂・僧房・200名規模の講堂・經典を所蔵する藏經閣などがあつたとする。したがって赤山法花院は、その地域の教化処として在唐新羅人をひとつに結束させる精神的柱の役割を果たしたのはもとより、観音信仰をもとに海上活動者の繁栄と安全を祈る拠り所として機能したのであり、寺院が壊されるや山東半島の在唐新羅人集団も急速に解体したであろうと説く。

第3章「東アジアのなかの在唐新羅人」では、まずこれまで曖昧にされてきた在唐新羅人社会という用語と概念を考察する。本書によれば、唐に移住した新羅人を最初に在唐新羅人と称したのは金文経氏であるが、在唐新羅人と在唐新羅人社会を現代の法制的観点から定義するならば、在唐新羅人は新羅出身で唐にわたり、永住またはそれに準ずる長期滞留を目的に定着して、

生業に従事した本人及び直系卑属に対する総称と規定することができ、ゆえに在唐新羅人社会とは、新羅人が多数占めた集居区域であり、該当区域を運営することにより新羅人としての実体を維持した社会であったと説く。また在唐新羅人は、現在の在外同胞と同様に帰化の有無にしがたい、唐に帰化した新羅系唐人と帰化しない新羅国籍人のふたつに分類でき、さらにその構成員には、指導者（総管・村長など）・長期滞留の僧侶や留学生（唐の制度によれば 9 年以上滞在すれば唐僧籍に編入）・唐の中央官吏や地方官・武将（押衙など）・海上貿易業者などが存在したとする。

次に著者は、9 世紀後半以降の新羅と唐・日本の貿易活動が在唐新羅人によって始められたことに触れ、新たな国際貿易の秩序である、西嶋定生氏のいう「東アジア交易圏」を形成、先導したのは在唐新羅人であったと説く。

加えて、その中で入唐求法僧円珍の事跡を考察することにより、彼の活動も在唐新羅人の助けにより成し遂げられたことを挙げ、在唐新羅人が 9 世紀東アジアの仏教交流を担ったものと論じる。

第 4 章「在唐新羅人の海上貿易活動」は、9 世紀に日本を往来した各種貿易船に関する史料を一括整理して、対日貿易に従事した新羅人の実態を検討する。まず張保臯が暗殺された 841 年以前に対日貿易に従事した新羅商人は、一部の例外を除いて新羅本土の者ではなく在唐新羅人であり、9 世紀に新羅国内が疲弊した状況にもかかわらず新羅人が対日貿易に従事できたのは、8 世紀後半から在唐新羅人が対日貿易を独占したためであると説く。そして在唐新羅人の対日貿易は、活動様相にしがたい、在唐新羅人が対日貿易を独占する 8 世紀後半から張保臯暗殺の 841 年まで（独占期）、紀三津事件以後の羅日関係悪化や張保臯独占貿易の後遺症並びに唐商人の成長により、在唐新羅人が独自の船団を運営できず唐商人と提携連合して対日貿易を行う 842 年から 860 年代末まで（提携期）、新羅海賊による日本侵攻から新羅に対する警戒心が生まれ、在日新羅人社会も解体させられ在唐新羅人の合法的な対日活動も断絶された 870 年代以後（断絶期）の、3 時期に分けられると主張する。

次に著者は日本側の史料から、李少貞や金珍・王超など数多くの 9 世紀の対日貿易に従事した新羅人たちが、唐の国籍を取得したいいわゆる新羅系

唐人であるにもかかわらず、唐と新羅の二重の国籍を称したことに注目する。これは単なる記録錯誤とは考えられず、二重国籍の出現背景には、在唐新羅人社会に帰化しない新羅国籍人と帰化した新羅人（新羅系唐人）が混在していたことがあげられると指摘する。さらにはその関係史料の性格を検討すれば、日本官省の関与が少ない個人的な史料では彼等を新羅人と表記するのに対して、官省の関与したものでは唐人と表記することから、それらはまさに当時の日本支配層の観念と現実の矛盾から派生した、对新羅観が投影された結果であるとも説く。

第5章「張保臯と在唐新羅人」では、在唐新羅人社会と深い関係をもつ張保臯を扱うが、本書では商業帝国の建設過程と海賊勢力との関係にのみ限定して論及する。まず著者は、張保臯が商業帝国を建設し得た最大の要因を在唐新羅人による人的支援にもとめるように、820年代初に唐の藩鎮から退役した新羅出身の軍人たちを軍事的基盤とし、張詠に代表される在唐有力新羅人や李少貞のような貿易業者たちを彼自身の支配下に置き、組織化された在唐新羅人社会を国際貿易活動に活用したためと説く。つまり張保臯集団は、在唐新羅人たちが開拓した交易網と精練した商術を継承・発展させ、新羅の清海鎮をセンターに、唐の泗州漣水県や日本の筑前国大宰府に自身の貿易基地を置き、船舶と人員を常駐させることにより、東アジア三国の海上貿易を主導したという。

次に著者は、新羅沿岸部の海賊勢力の動向に対して、その発生から張保臯の登場、暗殺以後の海上秩序とリンクさせて論じるが、中でも張保臯集団が清海鎮の軍事を背景に、海賊を含む群小海上貿易業者を自身のもとに統合し、合法的な国際海上貿易に活用したことを強調する。ゆえに張保臯の暗殺にともない、海賊が大規模化して日本にまで進出していき官物を奪取するようになったのも、従来張保臯の統制下にあった黄海の海上秩序が打ち壊されたことに起因すると述べる。さらにはこうしたいわゆる後期海賊の活動は、9世紀末から豪族が各地で登場するにつれ、豪族に討伐または包摂されることにより、海賊本来の姿を喪失していったという。ところで、著者は張保臯の死後10年間にわたり清海鎮が存続された理由についても自説を展開している。それは、張保臯を暗殺した金陽が清海鎮を軍事的・経済的勢力基盤として再

利用するためであり、851年に閉鎖されたのも金陽が元聖王系人物との争いで失脚させられたからであると論じる。

第6章「結論」では、これまで言及したことを改めて整理・総括する。すなわち、在唐新羅人の海上貿易活動は東アジアの国際秩序に変化をもたらし、羅唐日三国の文化交流の活性化にも大きく寄与したため、在唐新羅人とその社会は古代東アジアの展開・発展と不可分の関係にあったと位置付ける。

3. 本書の意義と問題点

これまで本書の概要と特筆すべき点を述べてきたが、次に評者の問題意識をふまえつつ、気付いた点をいくつか指摘しておきたい。

いわゆる在唐新羅人並びにその社会に関する研究は、約1世紀にわたり様々な個別論文が公表されており、特に近年ではシンポジウムの記録を活字化した著書も数多く出版されている。しかしながら在唐新羅人社会を総合的に考察した専門書は、金文経『唐代の社会と宗教（唐代の社会と宗教）』（崇実大学校出版部、1984）以外に見うけられず、金文経氏の著書内容の大半は在唐新羅人社会の仏教信仰であるため、本書は在唐新羅人社会に対して、政治外交・制度史の側面から取り組んだ最初の論文集であるといえよう。前述したように本書は、韓国はもとより日本・中国での既往の研究史を丁寧に整理し、それらの成果や問題点を十分にふまえて章立ても構成されており、在唐新羅人社会の研究に関連するほぼ全ての主題を網羅している。既往の論著では曖昧なまま使用された在唐新羅人社会などの用語の概念にはじまり、在唐新羅人社会の形成・運営の実態、対日貿易に代表される在唐新羅人の海上活動や彼等と張保皋の関係など、これまで個別的に検討された課題を相互関連させながら検討することにより、体系的な在唐新羅人及びその社会の実像を描き出した本書は、東アジア古代中世史はもとより、前近代の移民史研究の促進に寄与する成果といえよう。

さらに権恵永氏の前著も含め評価したいのが、ある特定のテーマに対し、各種の編纂史料や金石文に所々分散する関連記録を一括整理して一覧できる図表を作成することにより、読者に分かり易く提示する研究姿勢である。例えば本書においては、「9世紀の長期滞在在唐新羅求法僧」や「9世紀在唐新

羅人居住現況」・「9世紀前・後半の渡日貿易商人」などが掲載されており、こうした関心の高いテーマに対する蓄積された資料一覧は、多くの諸研究者に利用され、後学の研究の発展に多大な役割を及ぼすであろう。

ただし、本書に掲げられている論点を検討してみるならば、今後さらなる研究を要する部分や、いささか疑問と思われる点がいくつかみられる。

まず改めて本書全体をみれば、前述したように先学の豊富な研究蓄積（とりわけ金文経・李永澤・李炳魯・堀敏一・佐伯有清氏などの論著）に導かれて本書が書かれたことは理解できるが、個々の事項にはいくらか著者の新説が示されているものの、大きな論点についてはそれらの学説に対する著者自身の代案がほとんど示されていないため、著者の見解と通説の違いをそれ程読み取ることができない点は、評者としてはもの足りなさを感じざるを得ない。また著者は、東アジアの展開と発展という巨視的な観点から、在唐新羅人の活動並びにその社会の実態を総合的に検討してみたいと繰り返し述べられるが、著者も部分的に引用する比較的近年の研究成果と比べてみても、そうした側面がそれ程見うけられるとはいえない。

本書において、在唐新羅人社会における自治権の有無の問題や新羅坊・新羅村の性格に対し、広く唐の統治組織との関係から解明しようとした点は評価できる。しかしながらさらに踏み込んだ議論を行うためには、当時唐国内の各地域で半独立的な地位を築いた節度使及びその下にある役所官吏が、在唐新羅人社会の形成・運営に如何に関与したかや、新羅人社会が存在した楚州や山東半島登州など当該地域の政治制度・文化的状況との関連についてが、一層検討されなければならないと考える。とりわけ山東地域は、例えば1996年に青州の龍興寺跡（推定地）から発見された膨大な数の石仏群から窺われるように、特有の仏教文化・歴史を有したことが明らかである。また、著者は在唐新羅人社会が形成された理由に対して、羅唐間の歴史的交流により必然的に生まれる環境にあったことのみを強調するが、それらの地域で新羅人・新羅僧たちを受け入れ並存させた唐側の事情も積極的に研究されてもよいだろう。

次に、本書で最も強調する在唐新羅人社会の概念についていえば、評者も前述した著者の考えには同意するが、それは余りにも一般的な説明に終始し

たものといえる。本書では、在唐新羅人とは新羅出身で唐に定住した者であることが指摘されるだけで、例えば彼等の貿易活動に目を向けてみれば、日本に往来した新羅人が新羅出身であるかどうかの国籍問題に収斂されており、在唐新羅人社会の性格を裏付けるべき多様性・国際性並びにそれらをもち得た背景については全く触れられていないため、東アジア史上における在唐新羅人（社会）の位置づけはほとんど窺うことができない。ゆえに、このような観点に基づいた研究が一層進展されることにより、在唐新羅人及びその社会に対する概念も一層具体化されるものと考えられる。

また、紙幅の関係上すべてを挙げることはできないが、次のような個々の問題についても若干指摘しておきたい。

まず新羅人の移住理由である。著者はそうした要因を、新羅国内で起きた飢饉や政治的争いによる経済的困窮にのみもとめるが、もちろんそのような側面はあったろうが、両地域間で恒常的な交流が存在したことが何よりも大きかったのではなかろうか。著者も張保臯集団の唐における拠点として泗州漣水県の新羅坊を挙げるように、既往の史料からも張保臯をはじめ彼の周囲（彼の盟友鄭年や部下の崔暈等）は、漣水に渡り、そこでかなりの権限をもったことが明らかであり、彼等は飢饉のため偶然その場所に移住したのではなく、莞島地域と泗州漣水との間に存在した恒常的なルートを利用した可能性が高いことが推察されるのである。つまり、今後新羅人の唐移住においても、地域間交流のあり方とそうした交流の担い手に即した視点からの検討が必要になると考えられる。

こうした地域間交流とも関わる問題であるが、著者によれば8世紀後半以降の対日貿易は、本国の新羅人ではなく、すべて新羅出身の在唐新羅人が独占したという。確かに著者が指摘するように、この時期の新羅国内は動揺しており、公的な日羅関係も途絶えてはいたが、9世紀初の『三国史記』哀莊王代には日本使が頻りに新羅の朝廷に詣でていたことを伝える記事がある。この日本使の実体は、日本側に関連記録がないため定かでないものの、王権が関与しない交渉が大宰府・対馬と新羅との間に行われ、両国の官人の間に何らかの私的ルートができあがっており、そこで私貿易が展開されていたあらわれとみて相違ないだろう。それならば当然大宰府周辺でも、新羅本国の

来日商人と日本官人の間で交易等が行われていたと推定でき、日本に往来した新羅人たちを無理に在唐新羅人と結びつける必然性はないと思われる。

次には赤山法花院の役割である。著者は赤山法花院の役割を、在唐新羅人の教化処・結束の媒介と航海安全の祈願所という側面のみから説明する。しかしながら、『巡礼行記』によればこれらに加えて、この場所は山東半島登州の赤山浦に隣接して、唐から新羅に向かう外交使節や日本の遣唐使一行がここに宿泊し、州県の使いも頻繁にやってくる、円仁の公験取得もこの僧侶を媒介になされることから、赤山法花院には何らかの公的な機能が備わっていたとも考えられる。これに関連していえばこの寺院を管理した者が、節度使下の押衙張詠をはじめ、林大使・王訓、そして張保阜という多様な数名の俗人によりなされた事実も、寺院の性格と関係があるとみられる。そうした側面を如何に評価するかが次なる課題であろう。

加えて、赤山法花院の別名は赤山新羅院（新羅院の別名が法花院の可能性もある）であったが、『巡礼行記』によれば同じく新羅院が、長安に向う基点である青州の龍興寺と緇州長山県の醴泉寺の附属寺院として存在したことを確認できる。このことは赤山法花院においても、唐の地方政府との関係並びに、新羅の対唐交通や僧侶の求法活動に関連した交通の側面に即した検討が必要であることを伝えているだろう。

以上やや批判めいたことも述べてきたが、本書の価値がそれによっていささかも損なわれるものでないことをここに断わっておきたい。

終わりに、国家の枠組みを超えた視点から9世紀の東アジア史を解明しようという試みは、これまで主に日本側においてなされてきた感が強いが、近年では韓国側でもそうした研究が増加している。それゆえに、両者間の研究交流は今後さらに要求されていくであろうし、本書がその一翼を担うことを評者は願うのである。

(kkondo76@hotmail.com)